吉田秀雄記念事業財団では、広告・広報・メディアを中心とするマーケティングおよびコミュニケーションの研究に資するため、オムニバス調査を毎年実施しています。本レポートではオムニバス調査の内容を理解していただくとともに、調査結果データを研究者の方々が自由に使い、幅広く研究していただくために、分析事例を紹介します。今回は広告やマーケティングの背景にある、人々の意識を掘り下げる上で、日本の社会や世界の将来のイメージについて考察してみます。

# 人々を覆う巨大な虚無感と閉塞感
## 日本の社会と世界の将来に対する暗い見方

アド・スタディーズ編集部

協力　中村 公法　電通マクロミルインサイト

＊ オムニバス調査の実施概要 ＊
- ◆ 調査地域：首都30㎞圏
- ◆ 調査対象：満15～65歳の一般男女個人
- ◆ 抽出方法：ランダムロケーション　クォーターサンプリング
- ◆ 調査方法：調査員の訪問による質問紙の留め置き回収調査
- ◆ 回　収　数：750名

※今回は2017年7月に実施した調査データを活用して分析を行った

### はじめに

2017年度のオムニバス調査では、人々のコミュニケーションや消費生活、マーケティングを考える上で欠かすことのできない、人々の考え方や意識について2つの項目を新たに追加して充実を図った。

1つは「買い物についての考え方」で、「買い物が好き」「いろいろなモノを試してみることが多い」「いつも決まったモノを選ぶ」「一流品や有名ブランドのモノを買う」など、消費行動や買い物に対する基本的な意識について聞いている。もう1つは今回取り上げる、「日本の社会や世界の将来のイメージ」に関する項目で、人々が、自らを取り巻く社会や生活に対して、どのような見方をしているのかを聞く設問である。

オムニバス調査では東日本大震災以降、社会変化の重要事項（「コミュニティや地域社会が重要視されるようになる」「人々がより個人主義的な行動をとるようになる」など8項目）や、生活関心内容（「友人や同僚などとの付き合い」「自分や家族の健康」など10項目）、最近の生活・意識変化（「環境問題やエコに対する関心が強くなった」「買うものの安全性に気を配るようになった」など8項目）など、人々の価値観の変化に関わる設問を増やしてきた。これらの買い物に対する意識や、社会の将来に対する見方が付け加わることで、消費やコミュニケーションの背景にある人々の意識を、より多角的に捉えることができるようになった、と考えている。

### 1. 激動する世界と日本の社会

2017年はアメリカのトランプ政権の誕生とともに幕を明けた。大統領就任式が1月20日。その出来事が遠い過去のことのように思えるのは、社会や生活があまりに目まぐるしく変化するせいだろうか。

国内では森友・加計問題や相次ぐ大臣の辞任など、議会の混乱が続いた。北朝鮮のミサイルの脅威、そして緊迫する国際情勢、続発する自然災害など、ニュースの中に明るい話題を探すことが難しい昨今の情勢である。

そうした社会の現状を人々はどのように見ているのだろうか。そして社会の将来に対してどのようなイメージを抱いているのだろうか。

オムニバス調査では、こうした関心から、日本の社会や世

界の将来について10項目の設問を設け、明るい見通しと暗い見通しを6段階に分けて、イメージを聞いた。

10項目の設問は以下の通りである。

①A.日本の社会は安定した方向へ向かう－B.不安定な方向へ向かう
②A.日本の社会は活力を増す方向へ向かう－B.活力を失う方向へ向かう
③A.日本人の格差は縮小する方向へ向かう－B.格差は拡大する方向へ向かう
④A.日本は暮らしやすい社会になる－B.暮らしにくい社会になる
⑤A.日本人は多様性を許容する方向へ向かう－B.多様性を認めない方向へ向かう
⑥A.日本は明るく希望に満ちた方向へ向かう－B.暗く不安に満ちた方向へ向かう
⑦A.世界は明るく希望に満ちた方向へ向かう－B.暗く不安に満ちた方向へ向かう
⑧A.国家や民族、宗教間の対立は解消する方向へ向かう－B.対立は深まる方向へ向かう
⑨A.互いに認め合い、融和する方向へ向かう－B.いがみ合い憎悪する方向へ向かう
⑩A.技術の進化は人間らしい生活を推し進める－B.阻害する

回答の形式はAに近いかBに近いかを6段階の中から選択していただくもので、イメージが向かう方向をよりわかりやすくするために「どちらともいえない」を設けず、「とてもAに近い」「Aに近い」「どちらかといえばAに近い」「どちらかといえばBに近い」「Bに近い」「とてもBに近い」の中から1つを選択する方法をとっている。

【図表1】は6段階の回答をすべて表記したもの。【図表2】はイメージが向かう方向をわかりやすくするために「Aに近い」計と「Bに近い」計の数字をまとめて表したものである。

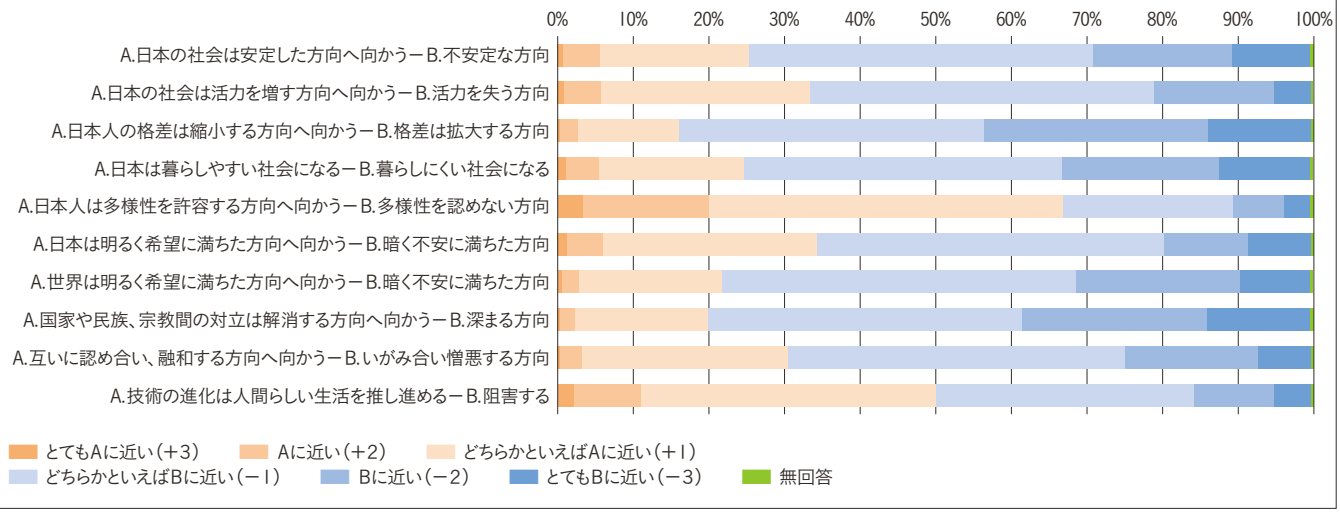
【図表2】を見ると、提示した10項目の設問の多くで「Bに近い」つまりネガティブな受けとめ方が強く、「Aに近い」とする者の数字を大きく上回っている。

最もネガティブな将来イメージが強いのは「日本人の格差」についての質問で、「拡大する」が83.6%に対して、「縮小する」とする者は13.6%にとどまっている。

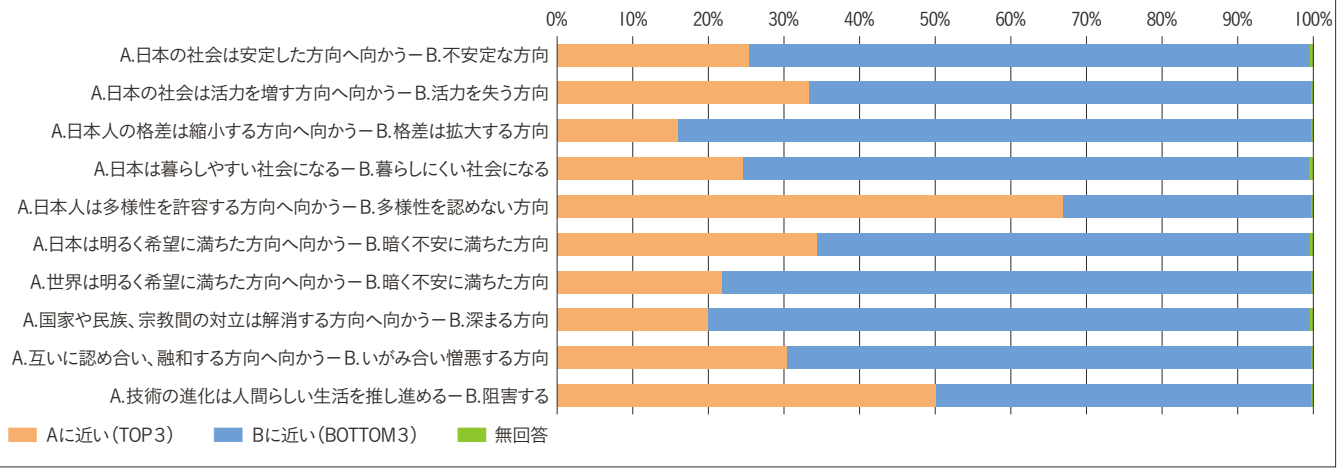
このほかにも、ネガティブな将来イメージのスコアがポジティブな将来イメージのスコアを大きく上回る項目が多く、「日本の社会は不安定な方向へ向かう」「日本は暮らしにくい社会になる」「世界は暗く不安に満ちた方向へ向かう」「国家や民族、宗教間の対立は深まる方向へ向かう」などの見方はいずれも7割を超えている。さらに「日本の社会は活力を失う方向へ向かう」や「日本は暗く不安に満ちた方向へ向かう」「(国家や民族、宗教は)互いにいがみ合い憎悪する方向へ向かう」という見方も6割を超え、大方はネガティブな印象を持っていることがわかる。

互いに対立し、いがみ合い、憎悪し合い、活力に乏しく、暗く、不安に満ちた、不安定な社会。それが2017年から未

**【図表1】社会の将来イメージ**



【図表2】「Aに近い」計 ー「Bに近い」計




来の方向を見通したときの人々のイメージである。

世界は巨大な虚無感と閉塞感に覆われている。

## 2. 将来悲観層が8割を占める社会

【図表3】は、10項目の設問のうち、何項目を「Bに近い」としたか、つまり悲観的な見方をしたかで、その反応個数を見たものである。

半数の5項目以上に「Bに近い」と回答した者を「悲観層」とすると、これに該当する者は、全体ではおおよそ8割を占めることになる。さらに10項目中8項目以上について「Bに近い」と回答している者を「超悲観層」と見ると、全体で約半数の47.9%がこれに該当する。

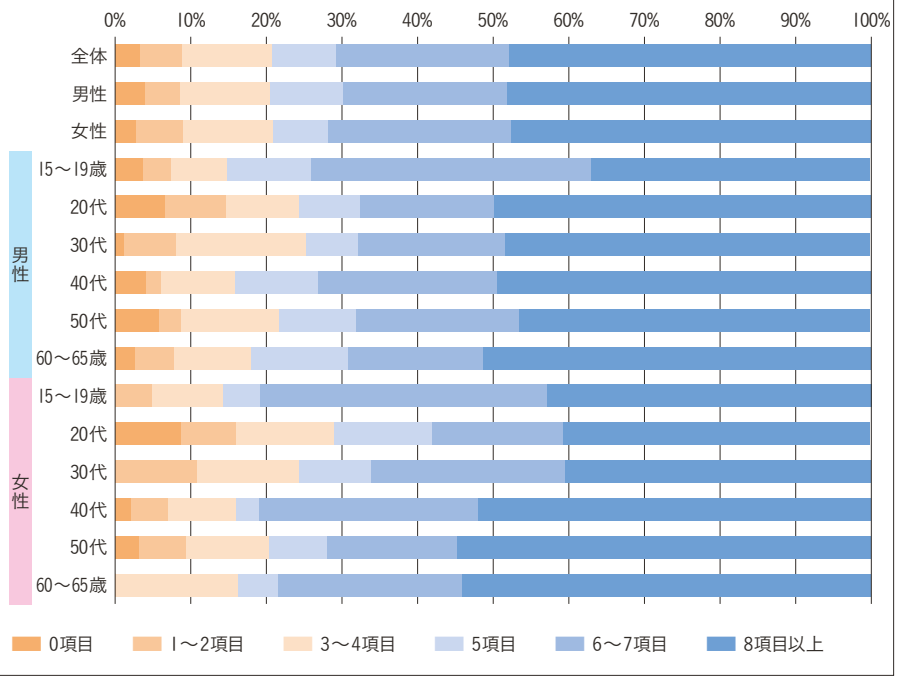
性×年代別ではどうだろうか。

「悲観層」とは反対に「Bに近い」が10項目中半数に満たない（すなわち4個以下）の者を「楽観層」と呼ぶとすれば、これに該当する者が2割を超えているのは、男女ともに20代、30代、それに50代である。これらの年代は、全体の中では、将来に対してやや楽観的な傾向を示している、ということができるだろう。反対に男女の10代、40代、60代では、楽観層が2割すら超えていない。

さらに「超悲観層」の分布ではどうか。男性では20代と60代、女性では40～60代で、超悲観層が50%を超えており、将来を特に悲観的に見ていることがわかる。最近では　若者や子育て層の生きにくさや、生活面の支援の必要性が指摘されることが多いが、高年齢層でも、決して明日の見通しが明るいわけではないようだ。

【図表4】は【図表3】と同じ内容のものを職業別に見たもの

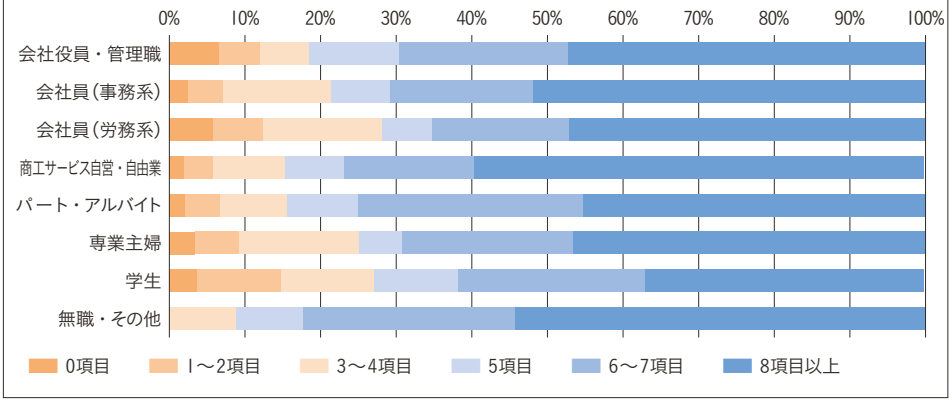
【図表3】「Bに近い」の反応個数　性×年代別



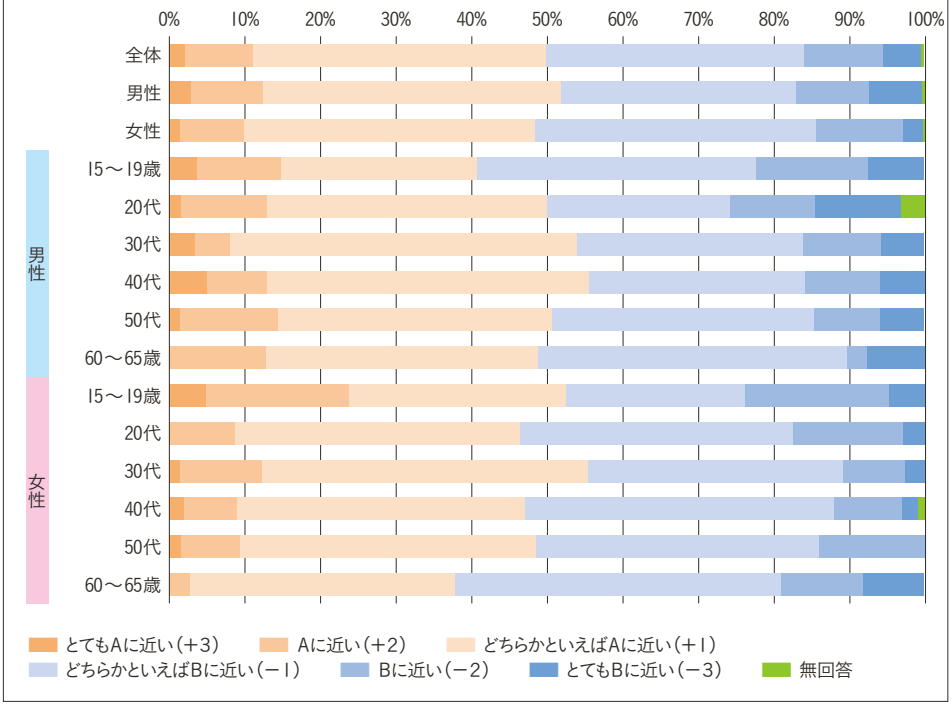
だが、こちらは将来のイメージの格差がさらに明確なものとなっている。「Bに近い」が8項目を超えるのは、商工サービス自営・自由業や無職の者が圧倒的に多く、前者では59.6%、後者では54.4%が、10項目中のほぼすべてに近い項目で、悲観的な将来をイメージしている。

反対に、楽観層が比較的多かったのは、会社員でも労務系の者、ほかには専業主婦や学生に多いことがわかる。ということは、将来の明るい見通しに影響を与えているのは、必ずしも経済的な側面だけでなく、精神的なゆとりも影響しているということだろうか。「働き方」という2017年のキーワードは、こうしたところにも影を落としているように思える。

【図表4】「Bに近い」の反応個数　職業別




【図表5】A.技術の進化は人間らしい生活を推し進める － B.阻害する




## 3. テクノロジーの進化は、必ずしも人間らしい生活を推し進めるばかりではない

もう一度、【図表1・2】をご覧いただきたい。将来に対して比較的明るい見通しが示されたのは、10項目の設問のうちの2つ。「技術の進化は人間らしい生活を推し進める」と「日本人は多様性を許容する方向へ向かう」の2項目である。

まずは、テクノロジーの進化に対する人々の意識について見ていきたい。

21世紀の初頭は情報技術が大きく進化し、それが基盤となってさまざまな分野におけるイノベーションを加速させてきた。医療分野でのイノベーションは人間の寿命を大きく押し上げているし、コミュニケーション・テクノロジーの進化は、人々を取り巻く情報の量を飛躍的に拡大させ、その流れを加速してきた。IoTは人間の暮らしの中の利便性を高めているし、環境に関わるような技術の進化も著しい。

しかしながら、技術の進化がもたらす人間の生活への影響に対する将来のイメージを聞くと、見方は二分されており、「人間らしい生活を推し進める」とする者と「人間らしい生活を阻害する」とする者はちょうど50対50で拮抗した状態にある（【図表5】）。前述のようなテクノロジーの進化が、必ずしも人間的な生活を推し進めるだけではない、という疑念を人々が持ち始めている、ということかもしれない。

性×年代別で見ると、悲観的な見方が目立っているのは男性の10代と女性の60代。恐らくは最も

テクノロジーに囲まれた生活を享受しているであろう若年層と、デジタルデバイドなどが言われ、テクノロジーから疎外される傾向が強いと想像される高年齢層で、共に悲観的な見方が楽観的な見方を上回っているのは、興味深い現象である。

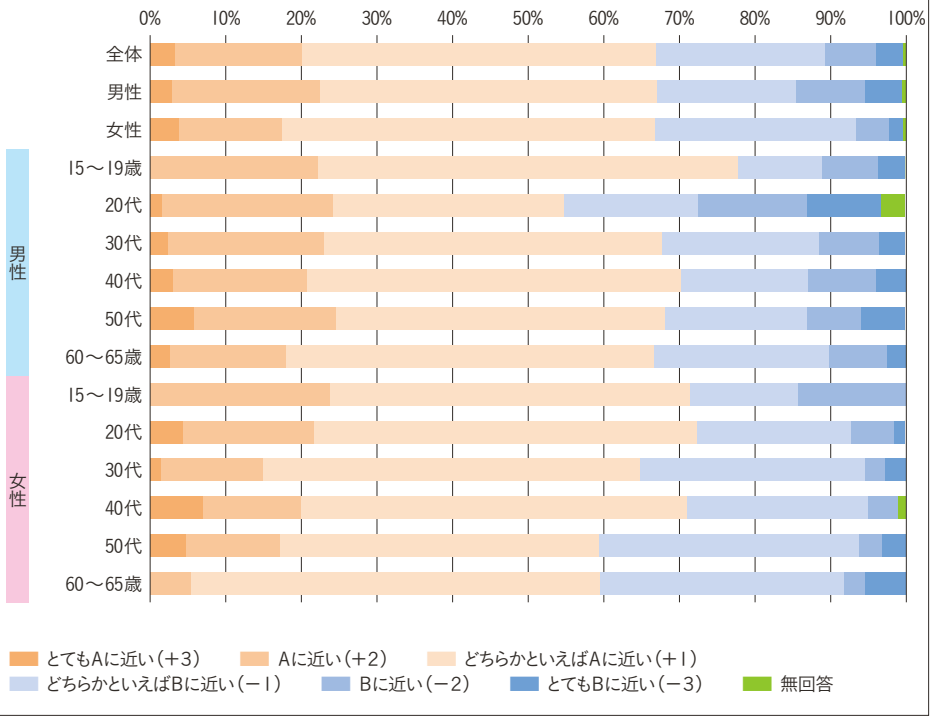
## 4. 社会は多様性を許容する方向へ向かっている

技術の進化が人間の生活にもたらす影響について、約半数の者が「人間性の阻害」を懸念している状況に対して、「多様性の許容」については7割近くの者が「日本人は多様性を許容する方向へ向かう」という見通しを立てている（【図表6】）。人と社会の未来に対して暗たんたる気持ちにならざるを得ない今回のレポートの中では、唯一、人間性の回復をイメージさせるような結果となった。『アド・スタディーズ』本号の特集テーマは「ダイバーシティ&インクルージョン」であるが、記事の中で語られているように、多くの人々のたゆまぬ努力がこうした結果に結実している、ということもできるだろう。

性×年代別で見ると、「多様性を認めない方向へ向かう」とイメージする者が3割を超え、やや多いのは男性では20代。女性では50代、60代の高年齢層だった。技術の進化にも疑念を呈することの多い年代とやや重なって見えるのは単なる偶然だろうか。

もちろん、この数字は見通しであって、現実ではない。だが、そこには男性中心の社会の中で疎外感を味わってきた女性、健常であることを前提とした社会で疎外感を感じてきた障がい者、自分自身のアイデンティティのありように常に向き合ってきた性的マイノリティ、そうした人々の笑顔を想像させる明るい見通しと信頼が見え隠れしている。少しずつ広がっていく変化の先に、多様であることが当たり前の社会の像が見え始めている。

【図表6】A.日本人は多様性を許容する方向へ向かう－B.多様性を認めない方向




## おわりに

以上、本稿では、日本の社会や世界の将来に対する人々のイメージについて分析を行った。見えてくるのは、人々の将来に対する悲観的な見通しであり、暗たんたる思い、虚無感や閉塞感だった。恐らく、人々の意識は防衛的であり、消費に対して与える影響も少なくはないだろう。今回、新たに追加した「買い物についての考え方」や社会変化の重要事項、生活関心内容など、人々の価値観のありようと組み合わせることで、見えてくるものは多いだろう。

人々の意識やイメージとは別に、2018年の日本は、そして世界はどのような方向へと向かっていくのだろうか。

人々の抱くイメージが現実を引き寄せないことを心から祈りたい。

※本稿は「オムニバス調査2017」の結果に基づいてとりまとめを行った。
平成13（2001）年度から平成28（2016）年度調査結果は当財団ホームページに公開している。

なお、本稿に対する問い合わせは下記まで。
公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団
〒104-0061　東京都中央区銀座7-4-17　電通銀座ビル4階
TEL：03-3575-1384　FAX：03-5568-4528